自分の心を大切に　自分らしく

女優　サヘル・ローズ

[プロフィール]
1985年、イラン生まれ。8歳の時に養母と共に来日。当時通っていた小学校の校長に日本語を学び、高校時代から芸能活動を始め J-WAVE でラジオデビュー。現在6つのレギュラーをこなす一方、映画や舞台にも多数出演。国際人権NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動で親善大使も務めている。

女優業に限らず幅広く活躍しているサヘル・ローズさん。イランで生まれ、戦争で孤児となり養母と共に来日。現在に至るまでの壮絶な道のり、学校教育や先生方に期待することなどについてインタビューをさせていただきました。

ー来日前のイランの状況と、養母であるフローラさんとの出会いについて教えてください。

４歳の時に孤児院に入りました。親を亡くしてしまった多くの子たちと一緒に、３年間生活をしていました。お母さんはそこへボランティア活動で来ていて、その時から「マダル」(ペルシャ語で母。)と呼んでいました。7歳の時に勇気を振り絞って「お母さんになってください。」とお願いしました。それから、いろいろなことを乗り越え、８歳の時に養子縁組が成立し、私を引き取ってくれました。イランは戦争をしていたので、私は誕生日が分かりません。母に出会って、養子縁組の成立した日を私の誕生日としました。私の人生はここからスタートしました。

ー来日のきっかけについて

当時のイランは革命があり、戦争もあって情勢はあまり良くありませんでした。また、母は結婚しており、旦那さんが日本の埼玉で空手の先生をしていました。あの当時のイランは女性が一人で子育てをする環境にはなくて、また、血のつながりのない私を引き取ったことで、親や親戚からも縁を切られる状態となり困りに困って、母は夫を頼って私を連れて1993年８月13日に来日しました。

ー来日してからの生活について

日本では埼玉で暮らし始め、埼玉に来て本当によかったと思っています。特に人に救われました。志木第三小学校という小学校に編入学しました。最初は言葉の壁があったり、文化や習慣の違いがあったりして戸惑ってはいたのですが、第三小の校長先生が私のために時間を作ってくださって、お昼の時間などを使って一対一で何か月も日本語を教えてくれました。また、外国籍の私たちにはとても高価で用意できなかったランドセルや体育着、給食セットなどの学校生活に必要な物を全て学校の先生方がそろえてくださいました。困っているから何とかしてあげようという気持ちで、助けてくれたのが学校の先生方でした。

子供って居場所を求めてると思うんです。それは家庭だったり、地域だったり、学校だったりとそれぞれだと思います。私も、日本での生活が始まると、だんだんお父さんとの関係がぎくしゃくしていき、学校が避難場所となり安心できる時間を持つことができました。学校の先生が唯一、助けてくれる優しい大人でした。学校は、ただ勉強を教える場所ではなく、おうちに居場所がなかったり、問題を抱えてたりする子にとっては助けてもらえる家のような場所です。そのようなとき、先生にとって大切なことは「寄り添う」ことだと思います。それは志木第三小の先生方の温かさを見ていて痛感しました。本当によくしていただいたので、今でも感謝しています。校長先生はもう８０歳を超えていると思いますがお元気で、今でも葉書のやりとりをするなど交流しています。

ー路上生活もしていた頃があると伺いましたが

そうです。今でも覚えています。柳瀬川の駅の近くにある図書館の隣の公園でした。白いお山のある公園でした。図書館も、この間久しぶりに行ったらまだあり、懐かしくてうれしかったです。

冬場の路上生活なので外は寒く、図書館が閉館になる午後８時までいて、暖をとってました。図書館が閉まると、公園のベンチへいって眠るような生活をしていました。

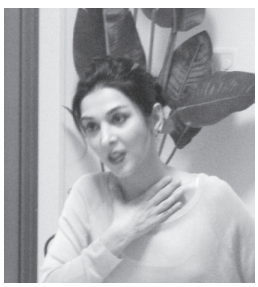
夕食は近くのスーパーへ行き、試食コーナーの試食で済ませていました。あるとき試食コーナーのお母さんが紙袋を渡してくれました。中を見るとおうちから食べられるものをたくさん入れて来てくれていました。その試食コーナーのお母さんとは、いつも試食をもらうだけで特別な会話をしていないのです。たぶん「この親子は困っているんだろうな。」と察してくれて、食べ物を渡してくれたと思うんです。こんな風に地域の

人にも助けてもらいました。今では、困っている人に声をかけるという社会ではなくなってきているかもしれませんが、本当に困っている人にとっては「どうしたの、大丈夫？」の一声を掛けてもらうことって本当に救いなんです。

大人は自分から「助けて」と言えないし、子供は「助けて」の言い方が分からないんです。しかし、困っている人は何かモールス信号のようなものを必ず出しています。服がどんどん汚れてきたりだとか、食べる量が異常に多かったりだとか、表情がおかしかったりだとか、どこかに異変が起きているのです。虐待の問題も、泣き声が聞こえてきたりとかアザがあったりだとか、何か異変が見られるものなのです。昔は何か異変があったら「どうした？」ってみんなで声を掛けたと思うのです。教育や子育ては、その家族だけの問題ではないのです。社会や地域でお互い支え合うことが大切なんだということを、私は埼玉で学びました。

ー路上生活を抜け出したきっかけはどういったものでしたか。

私たちに手をさしのべてくれたのは、給食の調理員のおばちゃんでした。ある時、学校から帰るときにどんどん服が汚れてくる私をみて、「大丈夫？どうした？」って声を掛けてくれたんです。声を掛けられれば、子供は答えることができます。私が、「コウエン、パーク、パーク、コウエン、イル」と片言で答えると、「もう行かなくていいから、うちにいらっしゃい。」と言ってくれました。私が「ママ、ママ」というと、「ママも一緒においで。」とさらに言ってくれました。それから約１か月、給食のおばちゃんのお世話になりました。困っているときは「お互い様」と言って助けてくれました。



子供は学校があります。学校に行けば、先生がいて日本語を教えてくれます。子供はかわいいので地域の人も面倒を見てくれますし、友達とも交流してどんどん言葉を覚えていきます。しかし、大人は働かなければなりませんので、日本語を学ぶ余裕がありません。日本語が分からないので日本語を話さなくてもよい仕事しかありません。職場と家の往復だけとなって人と話す機会がありません。人と話さないので、ますます言葉を覚えることができません。助けが必要なのはこうした大人たちなのです。こうした大人たちを助けてあげられるような地域だったり、社会だったりする仕組みづくりを急がなければなりません。

ー中学校時代はどうでしたか

母親の仕事の関係で何度か転校を繰り返し、東京の中学校に通っていました。ちょうどイラン人が偽造クレジットカードや麻薬を売っているなどと報道があった時期で、イラン人というだけで心ない言葉を言われるようになりました。それがいじめに進展し、上履きを隠されたり、暴力を振るわれたり、実験で持っていった花を踏まれたりしました。学校の先生や相談員さんに相談しても「気にしないことだよ。」と言われるだけで、向き合ってくれませんでした。母親には相談できず、つらい日々でした。迷惑を掛けたくない、悲しませたくないと思って親に相談できない子の頼りは、やはり学校の先生なのです。学校の先生が最後の砦なのです。子供たちの生き方に歩み寄ってほしいのです。話を聞いてほしいのです。

私の場合は頼りだと思っていた学校の先生に分かってもらえず、もうどうにもならなくなって、初めて母親に「死にたい。」と伝えました。すると、母親も「いいよ。一緒に死のう。」と言ってくれました。そのとき、初めて母の弱さも見えて、本当の親子になれた気がしました。

先生方も、いつも子供たちの前ではお手本ではなくて、時には弱さを見せて、子供たちに寄り添ってほしいと思います。勉強を教えることだけではなくて、人間らしい姿を見せて子供たちに寄り添ってほしいのです。思い出してほしいのです。先生になる前に、悲しかったこと、うれしかったこと、怒ったこと、つらかったことなどたくさんあったと思うのです。先生になったらそれにふたをするのではなく、その経験を子供たちの前で語ってほしいし、生かしてほしいのです。先生のリアルな葛藤を見ることで、子供たちも生き方を学ぶことができるのです。

ー高校時代はどうでしたか

人生の本当の恩師に出会うことができました。その先生は私を見抜いてくれて「どうしてそんなに、自分を周りに染めるの。あなたはあなたの良さがあるのだから、周りに合わせなくていいよ。」と言ってくれました。その恩師は私を自分の娘のようにかわいがってくれました。園芸高校の定時制に通ったのですが、そこでの先生方はとことん寄り添ってくれました。叱ってくれたり、成績が上がったら一緒に喜んでくれたり、兄貴というかお姉さんという感じで接してくれて、充実した日々を過ごし、大学まで行くことができました。勉強の仕方は人それぞれだと言い、ひとくくりにせずに、一人一人に合わせてくれました。

「何で分からないの？」って言われたら、その子はもう聞けなくなってしまう。頑張っても分からないし、分からないから聞いているのに、それを言われるとその子は困ってしまいます。「いいよ。できなくても。」と寄り添って、「あなたは何をやりたいの。１教科でもやってみようか。」と得意なことを一つだけでもいいから寄り添ってあげることで、その子は救われると思います。大学が全てではないし、社会に出てからだって学ぶことはたくさんあります。周りの子と比べて自分は劣っている、置いていかれたと思ってしまうのがこの時期の子供なのです。隣の芝生はとことん青く見えるのです。でも、自分の芝生は自分の刈り方でいいんだよ、人それぞれだよって教えてあげるのが先生だと思います。目指しているものは人それぞれだし、個性や考え方も人それぞれなんだから、それでいいんだよって認めてあげることが大切な気がします。「個を見てくれる」そんな高校でした。

ー「自分らしく」と言われても、サヘルさんのようにすぐになかなか変わることは難しいのでは

私は「自分らしく」と言われたとき、友達を求めなくなりました。日本の子供の社会は、いい意味でも悪い意味でも「グループ社会」なんですよね。何をするにも友達と一緒。トイレに行くのも一緒くらい。一人一人考え方が違うので、友達と一緒となるとどうしても合わせることになる。友達を演じようとすればするほどつらくなるのです。自分と同じ考えの者同士が、自然に年齢を重ねるうちに出会えると思うので、そんなに焦らなくていいと思うのです。「自分らしさ」というのはそういうことでいいんだと思います。自分を認めるということは、他人も認められることになるんです。

もちろん焦ることが悪いことではないのです。苦しいときほど、もがいているときほど、次のステップが待っているので、やれることをやればよいのです。

先生も同じだと思います。若いうちには焦りや失敗もあると思います。たくさん失敗すればいいのです。そのときに子供からたくさん得ることがあると思います。たくさんの子供たちに接することは、それだけで大きなストレスだとは思いますが、それを次の子供たちのために生かしてほしいと思います。無駄なことは何一つないと思います。

人それぞれ哲学があって、正解は一つではありません。「人は自分の生き方で、道はいくらでも作れるから。」ということを子供たちに伝えられたらいいなって思います。学校教育はもっといろいろな授業があっていいと思います。自分の未来の履歴書を作る授業だとか、自分の生き方を語り合う授業だとか。もっと自分と向き合う授業があってもいいんじゃないかなと思います。

ー教壇に立つ先生方に期待すること

それぞれの子供たちの心を見てほしいということです。それは子供たちを色眼鏡で見ないでほしいということです。茶髪とか、ピアスとか、言葉遣いなどの表面ではなくて、なぜそのような発信をしているのか、根っこの部分を見てほしいです。助けてほしい子は、大人に気付いてほしいというサインを必ず出しています。是非気付いてあげてほしいです。「どうしたの？」と寄り添って、仲間・友達になってほしいです。教え導くだけの先生ではなくて、友達になってほしいです。

ー今後の活動について

世界中の子供たちに、「道は自分で切り開くことができる」ということを伝えていきたい。日本を含めて世界中にはストリートチルドレンなど、助けを求めている子供はたくさんいます。私は今までに多くの経験をしてきました。その経験を発信して、困難は必ず乗り越えられるということを、子供たちに伝えていきたいと思っています。世界中を旅して、私にはたくさんの仲間がいますので、その仲間と発信していきたいと思っています。